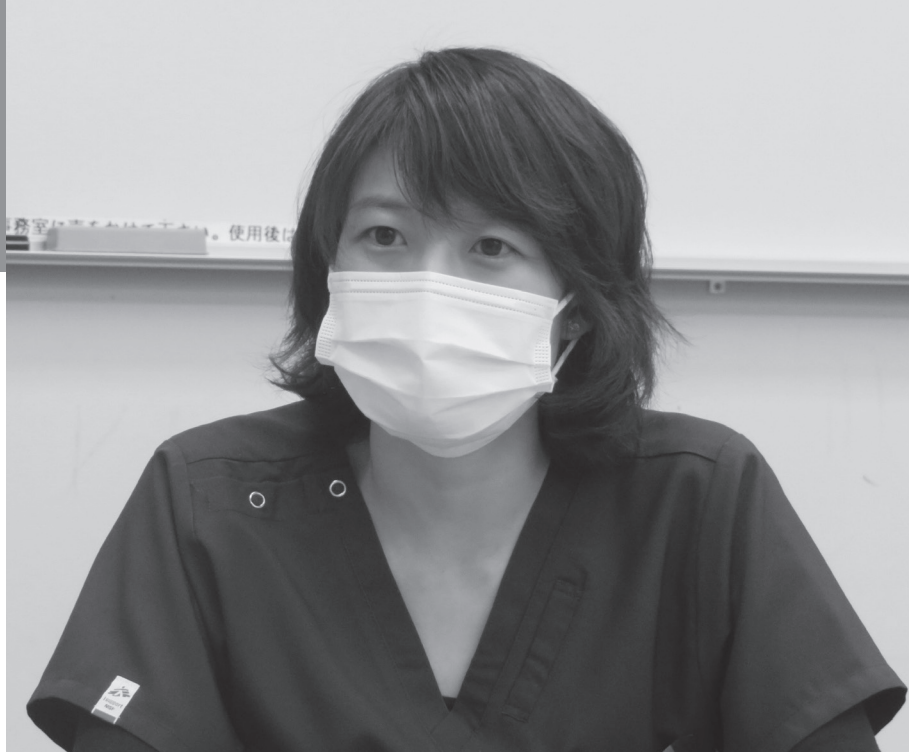


INTERVIEW

奥多摩町古里診療所 管理者兼診療所長
上柴このみ 先生



“人間の安全保障”という 問題意識から医師の道へ

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

別の道から医師を志す

山田隆司(聞き手) 今回は奥多摩町立古里診療所に
上柴このみ先生を訪問しました。

上柴先生は初代管理者の外山千也先生から引き継いで、昨年4月からこの管理者を務められています。地域医療振興協会の奨学金制度第1期生でもあり、奨学金を知ったきっかけや学生時代のお話から、振り返ってお話いただければと思います。

上柴このみ まず、奨学金をいただけたことに本当に感謝いたしております。香川大学医学部に学士編入し奨学金を考えていたのですが、豊島という乳児院のある離島に関心があり見学に行ったところ、自治医科大学2期生の岩井敏恭先生が島の診療所に勤務されておられ、「自分は将来

医療資源が乏しい状況でも働けるプライマリ・ケア医に関心を持ち学士編入した」という話をしたところ、「自分の同期の団体が奨学金を出していると聞いている」とすぐに協会本部に問い合わせてくださったのです。その後自分でも大学の生協で調べて、自治医大卒業の先生方が運営している団体なので、現場に根づいたものが学べるのではないかと期待もあり、とてもありがたい奨学金だと思いました。研修を終えて今、全ての研修先の先生や職員の方々にたくさん助けられ、学ばせていただけたことを実感しています。

山田 香川大学医学部へ編入される前は何かを学ばれたのですか。

上柴 文学部美学美術史学科で、芸術と社会を結びつけて人を元気にしたり異文化交流を促すといったことを勉強しながら、国際平和構築活動のNPOインターンとして、除隊兵士の社会復帰支援の現場に行かせていただく等の活動をしていました。当時“人間の安全保障”という概念があり、この視点で持続可能な紛争予防を考えると、法律に訴えにくい弱い立場の被害者がおり、その泣き寝入りが構造的な恨みようになって被害者がいつしか加害者とされてしまう暴力の連鎖が生じ得ること、また家族間の問題は人の健康に影響を与えることがあると考えるようになりました。

卒業後、暴力被害者の人権保障についてもう少し深めたいと思い、1年間、留学をして社会学修士課程で人権を学びました。自分の口で法律に訴えにくい社会的弱者、特に女性や子どもの被害を、非言語的なもので早期に察知し、法的、経済的な部分に限らず、本当の意味での尊厳を幅広く保障することに責任をもって関われる立場は、医師ではないかと考えました。それで留学後に医学部へ編入しようと思ったのです。

山田 先生は社会や人権の問題、社会的弱者といったものに興味をもって、そこに医師としての役割があると考えられたのですね。

上柴 そういう問題意識があり、調べていく中でプライマリ・ケア医という立場であれば可能なことがあるのではないかと期待を持ちました。

山田 何年生から編入になるのですか。

上柴 2年生の後期から編入し、3年生の時に協会の奨学金を受けました。

山田 それで縁あって協会とのつながりができたわけですね。先生は東日本大震災の時に女川町立

病院にお手伝いに来てくれましたよね。あれは何年生の時でしたか。

上柴 4年生になる前の3月です。アジア医学生連絡協議会(AMSA)という団体の活動を少ししていたのですが、震災の時に、学生は学生なりにどうしたらいいかと考えたのですね。現地に行く機会を持てれば情報共有もできるし自分たちの今後にもつながると考え、他の2人と一緒に3人でお世話になりました。

山田 とても真面目な学生さんたちで、非常に真摯な気持ちでやってこられたなと思いました。避難所の体育館がかなり厳しい状態だったので、一度フロアを掃除して区画を仕切り直そうということになりましたが、反対する住民がいたりして厄介な状況だったのですね。そこに先生たちを送り込んだのですが、真面目に、住民の人たちの感情にも配慮して対応し、フィードバックもしてくれたことをよく覚えています。

上柴 看護師さん、薬剤師さん、事務の方など多職種の方が協会のバスで現地に行かれ、女川町立病院のセンターアトリウムに仮設の診療スペースや薬局を設置して、医師だけでなく多職種が医療者としてシームレスに一丸となって患者様に向き合っている姿を見て、国家試験を受けたらこういう医療者になりたいと感じました。それはずっと自分の中にあり、今でも思い出すことです。

その後医師になってから、研修で女川町医療センターに半年行かせていただきました。それが復興計画の終わる最後の8年目で、センター長の齋藤充先生が変わらず住民に寄り添われていて、当時と全く変わらないのが素晴らしいと感じました。